

キャラクター名
 杜 鳴遥 (ドウ ミンイャオ)

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ		ワークス	防衛隊員	カヴァー	"ガーディアン"隊員
	モルフェウス					
オプション			年齢	21	性別	男
覚醒	素体	衝動	闘争	初期侵食率	37	%
出自	(84) 親戚と疎遠	経験	(43) 海外経験	邂逅	(40) 家族	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	27
肉体	3	0	0			3	行動値	17
感覚	3	1	0		4	8	(非装備時)	17
精神	1	0	0			1	戦闘移動	22
社会	1	0	0			1	全力移動	44

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃	10		RC			交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	1	
運転:	2		芸術:			知識:			情報: 軍事	2	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ハンドレッドガンズ		0		Lv+4		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品
 合計装甲: 0 合計回避: 0

メモリー: 仲間の死	
サイドリール	
コネ: 要人への貸し	
コネ: 調達師	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
実験体 (ロストナンバー)	P	N		
海外の友人	P 友情	N 隔意		
神城早月	P 信頼	N 憐憫		
"ルイン"	P 執着	N 脅威		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4 残り財産P: 2

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
ハンドレッドガンズ	5	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果: 射撃武器作成								
ジャイアントウェポン	1	2	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果: 武器攻撃力+5								
C: ブラックドッグ	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果: C値-Lv値 (下限値7)								
アタックプログラム	5	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果: 達成値+[Lv*2]								
ギガンティックモード	1	3	メジャー	武器	範囲 (選択)	対決	-	
効果: 対象変更: 範囲 (選択) 武器破壊								
魔弾の悪魔	3	4	オート	至近	自身	自動	リミット	
効果: 判定直後に使用可 達成値+10 シナLv回								
パーフェクトコントロール	1	4	オート	至近	自身	自動	80↑	
効果: 判定直前に使用可 達成値+10 HP-5 シーン1回								
	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

かつて孤児や捨て子を対象としたとある実験の末に『失敗作』として"裏九龍城"に棄てられた男。幼少期は血と闘争の臭いで満ちる修羅道で過ごした。自分と似たような子どもを集めて生きていた。ひどくシンプルな世界だった。『強さ』がすべての基準とされる世界だった。負けなければ、倒されなければ、誰にも指図はされないし誰にも馬鹿にされることはなかった。だから戦った、戦って戦って戦って戦って、己の中で荒れ狂う闘争本能に従い続けた。

—そんなある日仲間が殺された。自分を逆恨みする者たちの犯行だった。それは一度ではなく二度起こり、それだけでは止まらず三度四度と続いた。相手を始末しても始末しても終わらず、やがて己は裏九龍城を追われた。『お前がいると人が死ぬ』。『お前は死神だ』。『お前はここにはいてはいけない』。仲間たちのことは愛していた。しかし、彼らは己を愛さなかった。それが悲しくて、ひどく虚しかった。

それからは傭兵として各地を転々としながら暮らしていた。戦いに紛争に首を突っ込んで適当に情勢をかき回したし、たまにFHに雇われてはUGNの職員を相手取って派手に暴れた。もちろんUGNに雇われることもあったし、それ以外の組織に雇われることもあった。己はどこまで中立であり続けようとした。もう二度と誰にも追放されないようにと必死だったのかもしれない。

"ガーディアン"に配属されたのは、そんな日々慣れきたある日だった。これまで何かを壊したり、殺したりしてきた自分でも誰かを守ることができるのならば—。あるいは、やり直すことができるのかもしれない。